

〈論文〉

言語景観研究の現状について

江 源

キーワード：言語景観，共時的研究，通時的研究，総合的研究

はじめに

本稿は，言語景観研究が言語学的研究にもたらす新たな可能性を，関連分野の研究動向を踏まえながら展望するものである。言語景観は，地理学，社会言語学を始めとする諸分野において，さまざまな視点や方法による調査研究が世界中でなされてきた。ここでは，言語景観研究の状況をより包括的に捉えるために，(1)言語景観の定義について，(2)日本国内における研究，(3)海外における研究，(4)筆者による総合的研究 という4つの枠組みを設けた。

以下では，まず言語景観の定義を再考する。それを踏まえ，日本国内と海外に分けて，言語景観研究の動向を概観する。最後に筆者による研究のまとめと今後の課題を述べる。

1. 「言語景観」の定義について

『日本国語大辞典』（1998）では，景観を①「（ドイツ Landshaft, 英 Landscape の訳語）植物学，地理学用語で風景を主として植物相，地形の観点から眺めた場合の認識像をいう」，②「観賞する価値のある眺め。また，比喩的に，社会のある部面を眺め渡したとき見て取れる状況をいう」と定義している。

言語景観研究で扱う言語景観は，景観の下位概念に属する都市景観に見られる書き言葉を指すものが多い。景観工学の観点から見ると，都市景観とは，都市における人造物の造形をいい，都市を構成する自然や人工的建築物や工作物などの物理環境の眺めについての主として視覚的イメージをいう。広義に解釈するときには，都市における諸活動や，市民生活を反映した雰囲気など含まれているイメージをもいう（石井・元田，1993）。

日本では，言語景観という用語を使い始めたのは地理学者の正井泰夫である（正井，1972：153-158）。正井（1972）は「言語およびその視覚表現である文字からみた都市景観のことである」と定義している。このような定義ができる理由について後に正井（1983）の論文では，都市景観は，建

築物（高さ、色彩、材料、様式など）、道路網、緑、土地利用、住民など、さまざまな構成要素をもつ、「言語は文字という媒体を通して視覚に訴えることができる。その結果、景観要素となりうるのである。日本の都市のように、きわめて多くの看板が用いられているところでは、この言語景観が主要な景観要素の1つとなっている」、「言語景観はまた、異なる文化（圏）の認知にも役立つ」と説明した。

言語景観に相当する英語の「linguistic landscape」に関する社会言語学者 R. Landry と R. Y. Bourhis (1997) の記述を参考にして、バックハウス (2005) は言語景観を「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」と定義している。バックハウス (2005) は、また、言語景観を「日本語しか含まない単一言語表示」と「日本語以外、あるいは日本語の代わりに、ほかの言語を含む多言語表示」、また公的表示（道路標識、地名表示、官庁の標識など）と私的表示（店名表示、広告看板など）とそれぞれ二分している。

以上のように、言語景観研究には少なくとも、言語と景観との2つの側面に焦点を当て、考察する視点が必要となる。さらに、言語景観の定義もそれに応じて、新たに定める必要があろう。

2. 日本国内における研究

理論的出発点によって、先行研究を地理学的研究、社会言語学的研究、経済言語学的研究、言語サービスの研究というように4種類に分けてみた。これらの先行研究は、研究目的によって、データの採集方法がそれぞれ異なる点が多いため、直接に比較するのを控えたほうがよいと思うが、1つの地域あるいは複数の地域を1つの全体としてとらえる研究がほとんどであり、複数の地域を比較する研究はまだ十分でないようである。

2.1 地理学的研究

先駆的な調査として、地理学者の正井 (1969/1972) が1962年に新宿で実施したものがある。調査の対象は店名看板で、それを言語別、文字別、そして業種を踏まえて分析した。その研究の目的は「あまりにも地理学的研究ということにこだわるつもりはない。むしろ単にさまざまな言語、さまざまな文字が新宿という盛場において、いかなる状態で実在しているかを考察したい」としている。新宿では当時未だ漢字が圧倒的に多く使用されていたという分析の結果があるが、一時代前には、より漢字的な文化景観が見られたという点を考慮すると、1962年の新宿はローマ字によって代表されるような国際性・異国情緒がかなり見られるというべきだろうと述べている (正井1969)。

2.2 社会言語学的研究

1990年代後半よりほぼ10年の間に、言語景観は社会言語学において世界的に注目され始めた分野であると言われている。さまざまな研究が世界中で行われてきた。日本においても、染谷 (2002)、

金 (2005/2007), オバタ・ライマン (2005), ダニエル・ロング (2006), バックハウス (2006/2007) などをあげることができる。

染谷 (2002) は「看板の文字表記」というテーマで、小田急線沿線を中心に行った。染谷はターミナル駅をなるべく避け、日常生活の匂いがする商店街から駅周辺の看板をデジタルカメラで撮影し、採集した。その結果、看板の文字体系の使用傾向と、表記法の実態について考察した結果は日常生活において漢字の勢力が大きいことと、日本語のローマ字表記というより、外国語のローマ字表記が押し寄せていることが判明した。

金 (2005/2007) の一連の研究では、東京や大阪などの大都会で日本に在住する外国人が主にコミュニティ内の情報交換のために掲げる表示というところに注目して、これを中心に考察した。

オバタ・ライマン (2005) は「表参道店名の表記」を時間と空間とテーマ (企業名) の3観点から観察し、ここに現れる日本語の共時的・通時的変化と来たるべき時代の流れを比較考察した。特に、「街や通りのイメージ作りに表現としての店名表記は重要な要素である」という指摘に注目したい。

ダニエル・ロング (2006) は、奄美の言語景観の目を地域言語に向けて、「目に付く方言」の実態を探った。具体的には奄美でどのような言語景観が形成されているかを、それと関わっているいくつかの言語学的や社会言語学的要因から考察した。

バックハウス (2006/2007) は外国語表示が特に多い場所の一つの東京都内に焦点をあて、山手線の日暮里駅以外の28駅の周辺で、調査を行った。バックハウスは一定地域にあるすべての表示が使われている言語ごとに分類して、①「だれによっての多言語景観」、②「だれのための多言語景観」という2つの疑問から検証した。

2.3 経済言語学的研究

言語が商品、値段が付くものだという経済言語学の観点から日本の言語景観を経済原理とのかかわり、すなわち言語景観を支配する背後の原理を探るものとして井上 (2000/2001/2005/2007) の研究がある。近代の表記を

- ① 漢字優勢タイプ
- ② カタカナ優勢タイプ
- ③ アルファベット優勢タイプ
- ④ アルファベットプラス優勢タイプ

の4段階に分けている。一連の研究の結果をふまえた上で、戦後のカタカナへの傾斜、さらに現代のアルファベットへの傾斜があると述べている。また、「地域差は、日本全体の周囲論でなく、むしろ都市空間構成内部の地域差」(井上 2007) という指摘にも注目したい。

2.4 言語サービスの研究

来日した外国人たちは、さまざまな問題に直面している。そのうちの1つとして言葉の問題があ

げられる。言語政策の一環として、外国人が日本社会で順調に生活していけるように、日本人側から言語サービスを提供する必要がある。外国人に対する情報伝達という言語サービスの1つとしては、道路標識、街区表示板、地下鉄案内板、避難標識等のような外国人のための多言語表示である(河原 2004)。これらの問題を扱った研究としては、平野 (1996)、バックハウス (2004)、庄司博史・金美善 (2007)、田中 (2007)、田中・上倉・秋山・須藤 (2007)、田中・上倉・新坂 (2007)、小野原信善 (2007) らの研究が挙げられる。

3. 海外における研究

2 節では、日本における言語景観研究を分類して紹介した。実際に海外でもさまざまな視点や方法による調査研究がなされてきた。本稿では、紙数制限のため、その中の2つだけを紹介することにする。

3.1 バンコクに関する調査

バンコクはタイ王国の首都であり、政治的、経済的、文化的中心地でもある。その人口構成は主体であるタイ人のほか、華人、アジアと欧米から来た各種言語を母語とした人も数多くいる。

バンコクの言語景観に関する研究はまず Smalley (1994) によるものが挙げられる。調査対象はバンコク市内3つの地区における店名看板である。店名看板に見られる①文字使用、②言語使用、③ビジネス対象の言語使用、を分析した。その結果、住民構成の違いによって文字使用と言語使用の地理的傾向があることが観察された。

また、Huebner (2006) は都市における言語の多様性に焦点を当て、バンコク郊外 15 ヶ所を調査し、言語景観を公的表示と私的表示に分けて分析した。公的表示にはタイ文字の使用率が高く、私的表示にはローマ字の使用率が高いことが分かった。

3.2 国際比較研究

Scollon & Scollon (2003) は都市景観をディスコースの多様性による「記号論的結合体」(semiotic aggregate) と見なし、世界的範囲で調査を行った。「記号論的結合体」の概念を例証するために、彼らはアジアに位置する香港、北京、ヨーロッパに位置するウィーン、パリ、アメリカのワシントン D.C. を調査し、比較した。

Scollon & Scollon (2003) は都市空間におけるディスコースを①地方自治体主導ディスコース、②地方自治体公共事業ディスコース、③広告的ディスコース、④反社会的 (transgressive) ディスカースの4種に分類した。さらに、記号論的機能を①コード優先 (code preference)、②言語内容 (inscription)、③物理的位置 (emplacement) の3つの視点から各地言語景観の異同を考察した。

4. 筆者による総合的研究

前述のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究が果たした意義が大きい。その一方で、言語景観における通時の研究という視点を導入する必要性が生じていることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向変化を捉える視点として導入すべきである。

それから、言語景観における言語あるいは言語使用だけに焦点を当てたものが多いが、景観に含まれる言語外的側面にも関心を払うべきである。

以上のことから、江（2008）による具体的研究事例を示し、検討する。

4.1 研究概要

2007年6月から12月にかけて、銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町という5地域における言語景観について調査を行った。この5地域は質量ともに多言語化の著しい東京都内の代表的な商業集積地域である。公的表示は行政側や公的企業から計画的に提供されるものであるのに対して、私的表示においては規則がなく、その表示の作成者の意志次第で自発的に考案されるものである。商業施設の言語景観には経済原理が反映されやすいため、言語的多様性は公的表示よりバラエティーに富んでいるという（井上、2007）。

この観点から、江（2008）では、上記5地域のメインストリートの両側に掲げられているすべての店名表示、広告看板などいわゆる私的表示を調査対象にした。

採集した写真データを2つの非言語的要素（地域、業種）、3つの言語的要素（言語種、文字種、表記法）という5つのカテゴリーに分けた。

4.2 先行研究との比較による通時的考察

通時の変化を見るために、本研究と同質の先行研究を比較することを試みた。正井（1969/1972）と染谷（2002）のものは、調査目的、調査地域あるいは調査範囲が本研究と異なるが、いわゆる私的看板を扱ったという点で、本研究と同質なものと見なされる。ここでは、文字種の組み合わせ方という項で正井（1969/1972）や染谷（2002）の研究によるデータと比較してみる。文字種の各種組み合わせの件数はそれぞれの調査で得られたサンプルの総件数の占める割合を算出し、視覚化すると、図1となる。図1では、以下のようなことが考えられる。

- ① 漢字のみでの表記は年代順で顕著に減少していることが観察される。言語景観における日本語使用は減少傾向にある。
- ② ローマ字のみでの表記は急速に増加していることが観察される。西洋諸言語使用は増加傾向にある。
- ③ 門前仲町で得られた文字種の組み合わせ方状況は、染谷（2002）による文字種の組み合わせ

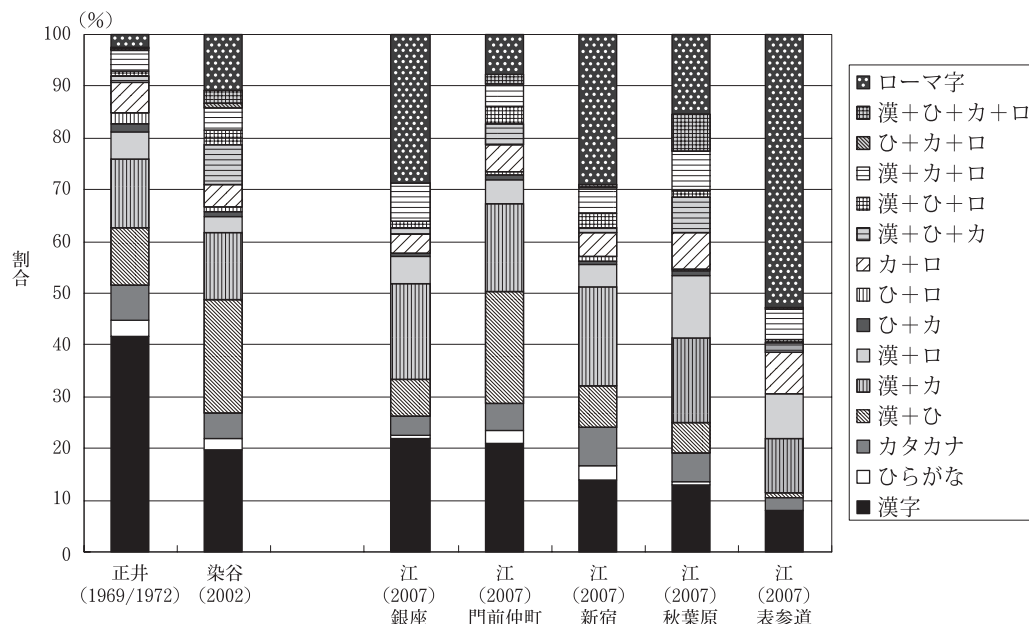


図1 文字種使用の通時的変化

方の集計結果と比べると、似たようなパターンであることが観察される。

- ④ 調査した5つの地域における漢字のみの表示の使用率を比較することによって、各地域の漢字のみの表示の使用率はそれぞれの地域の歴史の長さとは正比例をなすのではないかと考えられる。このことから、同時点での地域別調査を中心とした本研究でも、ある程度通時的変化が推察されたとと言えるだろう。

つまり、本研究と正井（1969/1972）や染谷（2002）の研究との比較によって得られた漢字（日本語）使用の減少傾向とローマ字（西洋諸言語）使用の増加傾向が見られた。ここから、多言語化は通時的に進んでいることが証明できるだろう。

4.3 Correspondence Analysis による総合的考察

4.2 では、言語景観における言語使用を通時的に考察したが、言語景観における景観という側面も研究視野に入れるべきである。景観的観点から都市環境とその街路を利用する人々の性格などを把握して、例えば「近代的センスの道」、「コミュニティの道」とか「歴史文化ふれあいの道」とか「若者の街」とか、都市のもつそれぞれの個性を尊重して、その個性を表現することが大切である。そして逆にいえば、街路を構成する要素の素材や意味を周辺と調和させる。したがって、言語景観に見られる言語使用状況もどの程度各地域のイメージを反映しているのかにも注目したい。

2つの非言語的要素（地域、業種）、3つの言語的要素（言語種、文字種^①、表記法）という5つの要素の相互関連関係を同時に見るために、Correspondence Analysis という多変量解析法の適

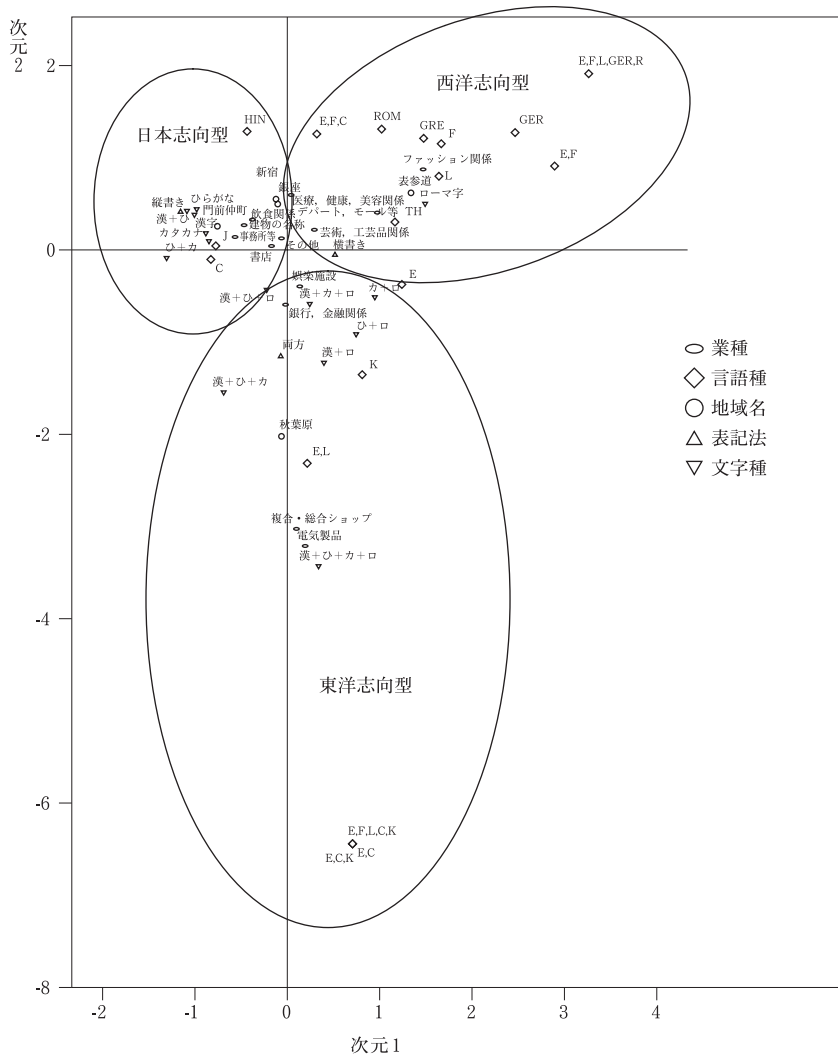


図2 Correspondence Analysis による総合的考察

用を試み、グラフを出した。図2から、調査した5つの地域における言語景観の多言語使用パターンを日本志向型、西洋志向型、東洋志向型の3つに分類できた。以下にその説明をする。

- ① 日本志向型：銀座、新宿、門前仲町では、縦書きで、しかも日本語の使用が主であることによって、いずれも日本志向が強いことが理解できた。業種分布を見ても、建物の名称、各種の事務所、飲食関係が多い。これらの業種の利用者は日本人が主であると考えられる。
- ② 西洋志向型：表参道では、横書きで、西洋言語の使用が7割も占めることによって、西洋志向が確認できた。医療・健康・美容関係、芸術・工芸品関係との2つの業種は西洋から多くのものを摂取しているため、西洋言語の使用の多いことがこの結果に表れている。
- ③ 東洋志向型：秋葉原には、電気製品売り場、世界的ブームを引き起こした漫画および関連グッ

ズを扱う総合・複合ショップ、娯楽施設としてのゲームセンターが多い。秋葉原では、日本語の使用率が銀座や新宿と変わらないが、日本語＋英語＋隣接国家言語（中国語、韓国語）との4ヶ国語によるものが多く、縦書きと横書きを併用する傾向が強い。これは秋葉原に通ってくる顧客が日本人の他に、近隣国家と地区（中国、韓国、台湾）の人が主体であり、この客層の消費活動を促す効果を狙うために町の表示が工夫されている結果だと推察される。

おわりに

本稿では、これまでの「言語景観」研究を概観し、また江（2008）による研究を通して、どのような展望が開けるのかを考察してきた。そもそも「言語景観」研究は言語学、地理学、歴史学、社会学、経済学等々といった多分野からの解明が統合されて初めてその全体像が見えてくるといふ、学際的分野なのである。本稿は、通時的、総合的考察という視点が加わることで、「言語景観」研究を考えた上で新たなスタートとなるだろう。

〈注〉

- （1） この分析では、朝鮮語やヒンデディー語などの言語の文字も、外国語表音文字の一種であるという観点から、便宜上ローマ字の項に分類することにした。

参考文献

- Backhaus, Peter (2006) Multilingualism in Tokyo: A Look into the Linguistic Landscape. *International Journal of Multilingualism*. pp. 52-66
- (2007) *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*. Clevedon・Buffalo・Toronto: Multilingual Matters
- バックハウス、ペーター（2004）「「内なる国際化」——東京都の言語サービス」河原俊昭（編）『地方自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』春風社 pp. 37-53
- （2005）「日本の多言語景観」真田信治・庄司博史（編）『辞典 日本の多言語社会』岩波書店 pp. 53-56
- （2007）「公共文字と日本の多言語化——東京の言語景観を事例に」国立国語研究所（編）『文字と社会』（新「ことば」シリーズ20）ぎょうせい pp. 92-97
- ダニエル・ロング（2006）「『わんきゃがやらんば！』観光客の目に付く奄美ことばの言語景観論的試み」『日本方言研究会 第83回研究発表会 発表原稿集』日本方言研究会 pp. 27-34
- Gorter, Durk (2006) Introduction: The study of the linguistic landscape as a new approach to multilingualism. In D. Gorter, (ed). *Linguistic Landscape, A New Approach to Multilingualism*, (pp. 1-6). Clevedon・Buffalo・Toronto: Multilingual Matters
- 平野桂介（1996）「言語政策としての多言語サービス」『日本語学』15(13) pp. 65-72
- INOUE, Fumio (2005) Econolinguistic Aspects of Multilingual Sign in Japan. *IJSL*
- 井上史雄（2000）『日本語の値段』大修館
- （2001）『日本語は生き残るか——経済言語学の視点から』PHP新書
- （2007）「多言語表示の経済原理」『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』社会言語科学会 pp. 255-256
- 石井一郎・元田良孝（1993）『景観工学』鹿島出版会

- 河原俊昭(編) (2004) 『地方自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』 春風社
- 金美善 (2005) 「言語景観にみえる在日コリアンの言語使用 — 新来者の登場がもたらしたもの —」 真田信治他編『在日コリアンの言語相』 和泉書院 pp. 195-224
- (2007) 「新宿の多言語景観 コリアンニューカマーの経済活動を中心に」『社会言語科学会 第19回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp. 272-275
- 江源 (2008) 『言語景観から見る日本の多言語化状況』 明海大学大学院 応用言語研究科修士学位論文
- (2008) 「言語景観に見られる東京多言語化の実態 — 商業集積地域を調査対象に —」『社会言語科学会 第22回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp. 86-89
- (2008) 「日本の多言語化状況に関する一考察 — 言語景観を調査対象に —」 第8回国際日本語教育・日本研究シンポジウム ポスター発表
- オバタ・ライマン, エツコ (2005) 「表記法から観察するビジネス・アイデンティティ：表参道商店街の店名(1)」『麗澤学際ジャーナル』 13(1) pp. 39-67
- 小野原信善 (2007) 「香川県の言語景観 — 国際化と言語サービス」 河原俊昭・野山広(編)『外国人住民への言語サービス：地域社会・自治体は多言語社会をどう迎えるか』 明石書店 pp. 206-229
- Scollon, R. & Scollon, S. W. (2003) *Discourses in place: Language in the Material World*. London and New York: Routledge
- Smalley, W. A. (1994) *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*. Chicago, IL: University Press
- 染谷裕子 (2002) 「看板の文字表記」 飛田良文・佐藤武義(編)『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』 明治書院 pp. 221-243
- 庄司博史(編) (2007) 『まちかど多言語表示調査報告書』 多言語化現象研究会
- 庄司博史 (2005) 「日本の多言語化」 真田信治・庄司博史(編)『辞典 日本の多言語社会』 岩波書店 pp. 48-53
- 庄司博史・金美善 (2007) 「京阪神の多言語表示にみえる多言語化現象 — 2005年まちかど多言語表示調査から —」『社会言語科学会 第19回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp. 324-327
- 田中ゆかり(編) (2007) 『山手線の多言語状況』 日本大学文理学部国文学科
- 田中ゆかり・上倉牧子・秋山智美・須藤央 (2007) 「東京圏の言語的多様性 — 東京圏デパート言語景観調査から —」『社会言語学 第10巻第1号』 社会言語科学会 pp. 5-17
- 田中ゆかり・上倉牧子・新坂望 (2007) 「東京圏の言語景観 — 山手線各駅調査と鉄道会社アンケートから」『日本語学会 2007年度秋季大会予稿集』 日本語学会 pp. 207-214
- Landry, Rodrigue & Bourhis, Richard Y. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16, pp. 23-49
- 正井泰夫 (1969) 「言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告」『史苑』 29巻2号 立教大学史学会 pp. 44-55
- (1972) 『東京の生活地図』 時事通信社
- (1983) 「新宿の喫茶店名 — 言語景観の文化地理」『筑波大学地域研究』 1